

入社式
奨励

「愛は礼を失せず」



石井裕二

(大学神学部教授)

コリントの信徒への手紙一 13・1-7

わたしたちは同志社の「社員」として集まり、入社式を挙行している。わたしたちが携える身分証明書は「社員証」であって、通しの社員番号がついている。昔風に言えば、わたしたちは揃えの「同志社」の社名の入った印半纏を着る仲間、今様に言えば同志社のネームの入ったユニフォームを着る仲間である。事実、わたしたちはすべて同志社の社員として世間に相対し、世間からもそう見られる。

この「同志社」の名は今では世間によく知られているために、聞く人に特別な感じを与えることはないであろう。しかし、改めて考えてみると、この名には特別な響きがある。「志を同じくする人々の結社」という名を持つ同志社は、本来の意味におけるカンパニーである。

創立者新島襄先生は、かねてよりキリスト教主義の学校を設立する固い決意を携えて帰国しておられたが、志を同じくする京都府顧問山本覚馬氏と出会い、同志社を結社された。明治八（一八七五）年六月のことであ

る。結社に当たっては、新島、山本両先生が結社人となり、宣教師デイヴィス先生が賛助人となっておられる。最初の公文書『私塾開業願』は、結社二カ月半後の明治八年八月（四日）新島先生が執筆され、（二十三日に）京都府庁に提出された。文末に「結社人」として、新島襄と山本覚馬の名が記載されている。「同志社」という社名は、その時山本覚馬氏によって命名されたと考えられている。それ以降、新島先生はご自身の公的な署名を《同志社社長》または《社員総代》としてお書きになる。

やがて社員は拡充される。明治十八年制定の『社則四ヶ条』は「社員」の意味を定めた。それによれば社員とは、同志社の「財産を所有し、キリスト教主義をもって学校を維持することにつとめ、学校と政府との間に生じる事務を処理する任にある人々」である。「社員会」が組織されたが、所管事項はだいたい後日の理事会に相当する。

昭和二十二（一九四七）年、「同志社社員」の意味が現在のものに改められた。同年五月実施の『同志社職制』第一条は、「同志社に職を奉ずるものを同志社社員とす」と定めている。これによって同志社社員の範囲は拡大されたが、同志社が「志を同じくする人々の結社」であるという意味を改変したのではない。同志社の名が続く限り、同志社の意味が変わることはあり得ない。

同志社の社風の根本はキリスト教主義である。この社風に関連して、キリスト教主義における一つの事実に注目していただきたい。それは、キリスト教が多様な要素を包括するという事実である。キリスト教のこの多様さの中にあつて、『同志社のキリスト教精神』は包括的で寛容なキリスト教理解の上に立ってきた。この理解のゆえに、同志社のキリスト教主義はこれまで、他の諸宗教や他の世界観を排斥する排他主義・独善主義に陥らない努力を傾けることができた。言い換えれば、同志社がこれまで排他・独善に陥らない社風を維持することができたのは、同志社みずからがキリスト教主義の土台の上に立つことよつてである。

キリスト教主義のよりどころは聖書である。聖書そのものが、じつは、包括的で寛容なキリスト教のあり方を教えているのである。その意味を逆手に取れば、聖書はどんな読み方でもできることになる。実のところ、聖書の言葉は、様々に違った意味と文脈において用いられることがあり得る。

しかし、聖書は様々な違った読み方ができるからと言って、聖書がどんな使われ方をしてもよいということではけつしてない。たとえば、聖書の中には有名な道徳訓が豊富にある。それらはわたしたちの人間的な本性を鋭く見抜いたものであつて、まじめに読めば骨身に伝わる。大切なことは、それらの言葉はすべて、自らをたしなめ自らをただすための教えであるということである。

それゆえ、それを自分を正当化するために用いたり、他人を非難するために用いたりすれば、聖書の意味と意図をねじ曲げるものとなる。たとえば、先に読んでいただいた聖書の箇所にも、「愛はねたまない、いらだたない」と書いてある。「ねたま」や「いらだち」は誰にでもある。それゆえ、「愛はねたまない、いらだたない」という教えは、素直に受け取ると自分の骨身に伝わる。そこで言い訳を考える。物事には基準値または許容値というものがある。それを自分で適当に作つて当てはめる。そして、聖書にはこう書いてあるが自分の「ねたま」や「いらだち」は基準値の範囲内、少なくとも許容範囲内なのだと自分で自分を納得させる。これは自己正当化のために聖書をねじ曲げる読み方の典型である。もつとたちの悪いのは、聖書の言葉を他人の非難のために用いることである。たとえば、「あの人はクリスチャンなのに、ねたま深いし、よく怒る」と非難する。これは聖書の悪用である。

わたしたちはおつぱら自らを戒めなければならぬ。その意味において、先ほどの聖書の短い一句に改めて目をとめよう。「愛は礼を失せず」。

「礼を失せず」とあるところは、「不作法をしない」（口語訳）、「非礼をおこなわず」（米国聖書会社訳）等の

訳文もある。その語のもとになっている「礼を失する」という語は、「相手の立場や生活習慣を無視して、自分の主張を押しつける行為」を意味する。

聖書の戒めは消極的に読むこともできなくはない。消極的な意味の取り方では、聖書の教えを「自分のために」読む。ここでは、それによって自我を抑制し、他の人々の間で融和をはかる処世訓になる。「礼を失せず」とは、たとえば「自分の立場が悪くならないために礼儀正しくする」ことになる。

この消極的な読み方は間違いである。この聖書の言葉は積極的に読むことだけが可能である。なぜなら、聖書の「礼を失せず」は「愛」という主語を受けているために、「自分のために」読むことは許されないからである。愛には相手がある。聖書の文脈は、「もし愛がなければ」、「礼を失しない」ことは「無に等しい」と告げている。ここでいう「愛」とは、自分自身の利益を目的にしないで、もっぱら相手のために尽くす態度と行為である。「相手のために尽くす」ことが積極的なのである。「愛は礼を失せず」。もっぱら相手の人のために、相手の人の立場と生活習慣を尊重する。

同志社は結社後百二十三年になる。その歴史の歩みはこれまでけっして平坦無事な道ばかりではなかった。その中であって、志を同じくする人々が労苦を分け合い、自重自戒し合いながら、同志社は今日を迎えている。新入社の方々は、今から社員として同志社の歴史と伝統の中に加わられる。その伝統の中には、「愛は礼を失しない」こともまた含まれる。

以前から奉職しているわたしたちは、新しい社員の方々に「礼を失しない」ように、改めて自戒しよう。新しい人には新しい生き方があり、新しい感覚がある。わたしたちはそれらを尊重しよう。同時に、新入社の方々にも、「礼を失しない」こと、とりわけ同志社の伝統に対して「礼を失しない」ことをお願いしたい。伝統に参加し、将来に向けて伝統をよりよく発展されるよう期待する。

(一九九八年四月三日「教職員入社式」)